



TITLE:

Caregivers' lived experience in trying to read slight movements in a child with severe brain injury: A phenomenological study( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

Kameda, Naoko

---

CITATION:

Kameda, Naoko. Caregivers' lived experience in trying to read slight movements in a child with severe brain injury: A phenomenological study. 京都大学, 2018, 博士(人間健康科学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21035>

RIGHT:

Wiley OnlineOpen. Gold Open Access権を購入します。

京都大学	博士（人間健康科学）	氏 名	亀 田 直 子
論文題目	Caregivers’ lived experience in trying to read slight movements in a child with severe brain injury: A phenomenological study (重度脳損傷児の微細な反応の意味を読み解こうとするケア提供者の生きられた経験：現象学的研究)		
(論文内容の要旨)			
【 背景 】			
植物症や最小意識状態患者を含む重度脳損傷児は増加傾向にある。重度身体障害と動きの再現性の乏しさが彼らへのケア改善を阻む。複合的障害を持つ重度脳損傷児の特に動きに関するエビデンス不足、受傷原因や発達による多様性から、彼らへのケアはケア提供者の経験に頼らざるを得ず、この経験はいまだ学的に探究されていない。			
【 目的 】			
研究目的は、10 歳重度脳損傷児の微細な動きを読み解こうとするケア提供者の生きられた経験を探求することである。			
【 研究デザイン 】			
本研究は、van Manen (1991)の解釈学的現象学的方法に基づく質的研究である。			
【 方法 】			
重度脳損傷児本人に動きの意図を確認することはできないため、ケア提供者全員に研究参加を依頼し、重症心身障害児者施設の 1 病棟にて 5 か月間、3 時間×21 回の参加観察と 15～45 分間×5 回のグループインタビューを実施した。研究参加者は心肺停止（0 歳 4 か月時）による重度脳損傷、人工呼吸器装着中、低体温であり、聴性脳幹反応はなく、普段は数ミリの瞼の動きと頸部の動きしか認められない 10 歳児（A 君）と A 君のベッドサイドで観察されフィールドノートに記載された 61 名のケア提供者（家族、看護師、生活支援員、医師、理学療法士、教諭、学校看護師、病棟クランク、清掃員）、グループインタビューに参加した 28 名のケア提供者であった。研究参加の辞退者はなく、研究参加者のうち 9 名が論文中の記述に含まれた。ケア提供者自身が未だ気づかず、気づいていても不確かさを含む経験を開示するために van Manen の解釈学的現象学的方法が用いられた。信頼性確保のために現象学的解釈学的分析の専門家のスーパーバイズを受け、また真実性確保のためにケア提供者 70 人の参加観察とグループインタビューを併用し、メンバーチェックを受けた。			
【 結果 】			
A 君の微細な動きを読み解こうとするケア提供者たちの経験として 4 つのテーマが浮かび上がった。ケア提供者たちは〈A 君の身体状況と彼の微細な動き〉を熟考し、〈A 君の微細な動きに関するケア提供者の不確かな感覚〉を発見し、それを確かめようと酸素飽和度モニターを隠し、モニターの位置が変更になったことを A 君に問いかけ〈A 君の複数の微細な動き〉を読み解こうとしていた。ケア提供者たちの経験の〈シェアリン			

<p>グ）によって「怖い」という感覚が「A 君の目力」と解釈され、「モニターは友だち？」という A 君の意図を読み解き、確認する声掛けに至っていた。</p> <p>【 考察 】</p> <p>本研究結果は、重度脳損傷児の微細な動きを読み解くための方策を明らかにした。提示した 4 つのテーマは重度脳損傷児の微細な動きを読み解く際、アセスメントやガイドと成り得る。ケア提供者の経験の〈シェアリング〉は複数での解釈にも繋がり、A 君の微細な動きを読み解くために必要不可欠なものであった。</p> <p>意思を直接確認できない患者へのケアの最適化は世界的課題である。我々の結果はこの課題解決のために、客観的データだけでなくケア提供者の経験を熟考すべきことを強く示唆している。〈シェアリング〉に必要なことはケア提供者の気づきだけなので、国・病院／施設の経済状況と文化の違いに関わらず容易に実践導入可能である。</p> <p>本研究は、1 病棟での現象学的研究であるため研究成果の一般化は難しいが、読者は A 君の微細な動きを読み解こうとするケア提供者の経験の追体験により新たな視点を得ることができるだろう。</p> <p>本研究の成果をもとにさらなる解明を進めることで、今後益々増加が予測される重度の障がい児者、意思表示ができない患者の支援に携わる様々な職種の支援者に新たな視点を提示することが期待される。</p> <p>（論文審査の結果の要旨）</p> <p>本研究は、10 歳重度脳損傷児 A 君と彼のケア提供者 70 名の研究参加を得て、抽象度の高い van Manen による現象学的方法を実践場面で用い、重度脳損傷児の微細な動きを読み解こうとするケア提供者たちの生きられた経験の記述・解釈と研究方法の例示を試みたものである。その結果、ケア提供者たちの生きられた経験の構造として 4 つのテーマが抽出された。ケア提供者たちは、〈A 君の身体状態と微細な動き〉を見出し、熟考し、その中で〈A 君の微細な動きに関するケア提供者の『不確かな感覚』〉に気づき、酸素飽和度モニターを隠すことなどによって A 君の〈複数の微細な動き〉をさらに読み解こうとケアを発展させていた。そのような重度脳損傷児の微細な動きを読み解こうとするケア提供者の生きられた経験の構造の 4 つ目のテーマ〈シェアリング〉は、ケア提供者の『不確かな感覚』を『より確かな感覚』へと移行させる役割を持っていることが明らかとなり、単なる経験の共有にとどまらない重要な概念であると推察された。</p> <p>以上の研究は、重度脳損傷児の微細な動きを読み解こうとするケア提供者の生きられた経験の解明に貢献し、重度脳損傷児のように意思表示が難しい状態にある患者の支援者たちに新たなケアの視点を提示した。また意思を直接確認できない患者へのケアを探求するための現象学的研究方法の開発に寄与することが期待される。</p> <p>したがって、本論文は博士（人間健康科学）の学位論文として価値あるものと認める。</p> <p>なお、本学位授与申請者は、平成 3 0 年 2 月 8 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。</p>			
要旨公開可能日： 年 月 日 以降			